

# ソモト・エモーショナル・リコール&リリース』 関連資料（5）

引用・出典

◆ソモト・エモーショナルリリース 体性・感情・解放とその向こう  
ジョン・E. アプレジャー（著）34～57頁

2.

エネルギー嚢と  
ソマト・エモーショナル  
リリース  
最新版1990年

最初はソマト・エモーショナル・リリースでの体験からでたもので、多数の患者が過去世において、もう一度死の場面まで後退するというものだ。彼らは、今度は、より許容できるやり方でそのプロセスを再体験するのだ。ソマト・エモーショナル・リリースの仕事をしていると、あなたもこういうふうに過去世を体験(作りだしておられるのかもしれないが)したり、死に対するフラストレーションや、今世までもいくつかの症状を持ち越しているといったような患者につきあつたことと思う。過去世や、そのときの死からのフラストレーション、怒り、罪や、恐れが解決されると、こういった症状は自然に消えてしまう。それはまるで、本人の過去世での死のプロセスが未完了であったかのようなのだ。今まで私は、亡くなつたときに持つていた破壊的な感情や、フラストレーションの感覚を解決するのが唯一、重要な要素だと思っていた。今では少し考え方を変えた。それは許しの問題だけでなく、質的に死のプロセスを正しく全うする、ということも含んでいるのだ。死ぬというのは、人生を質的に正しく完了する、ということなのだ。

死は人生の一部で、死は正しく完了されるべきだ、と自然は教えているのだ。自分は自分の人生で何をしてきたのかを振り返ることは、たぶんこの完了過程の一部なのだろう。その在庫品をとりだして、それが何を示しているのか、何を学んだのかを見てみよう。死は、自分の存在の中のもう一つの一章だと受け入れよう。それが出来れば、これ以上未完了の感覚を引きずっている必要はないように思われる。

二つ目は、“間際”の際にいてなかなか死ねないでいる人との私の体験からきている。その人たちには、まるでそこで立ち往生しているようだ。この人はすぐ死ぬ、とみんなには分かっているのに、何かがそれを阻んでいるようだつたり、ひどい痛みや、苦痛がありながらもなかなか死が訪れないのだ。自分の人生との和解ができれば、その人々は自由になり、プロセスは完了するのだ。その準備が整う前に亡くなると、生物学的未完遂を次の人生、または永遠に持ち越したりするのだろうと私には確信できる。この未完遂ゆえに、適当な死のプロセスを完了するまで、彼らにフラストレーション感を残すのだ。

1963年から64年にかけて、私がインターーンだったころに、このことを見せられたのが始めてだった。ある夜勤の仕事のときに、腹部手術を終えたばかりの患者を受け持った。患者はポーランドからやってきていた40代半ばの男性だった。脾臓癌が腹部全体に広がっていた。外科医は開腹手術を行つただけだった。癌が広がっているのを見たときに、手遅れとしてまた腹部を閉じただけだった。腹腔内の出血を止めることは出来なかった。本人も家族も、本人が死に瀕しているということを知らなかつた。私はそのとき、病院にいなかつた妻と家族に通知し、僧の最後の儀式を用意するまで出来るかぎり患者を生かしておくようにといわれた。患者は2ユニットの輸血を受けていた。一袋は片腕に。またもう一袋は足の静脈から入れていた。

私は個人的にも身体的にもこの患者と知り合いになつた。身体的には、この患者は今にも死ぬのは明らかだった。私が見ているうちにも、血圧が下がつた。彼は意識を失つた。血圧をあげるために、私はバソプレシンの一種、アラミンを静脈管から注入した、すると彼は意識を戻した。彼は私を見て微笑んで、“もうちょっとで死ぬところだったんですね”といった。私は言いたくはなかつたが、そうだ、といった。この患者に対して、どうやって嘘をつけといえるのか。良くなる見込はあるかどうか、

彼は尋ねた。

私は彼に、癌が腹部全体に広がっていて内出血をしているといった。治る見込はないように思うが……、それは神のみぞ知っていることですよ、と私は答えた。私が今晚ずっとついていて、して欲しいことがあればベストを尽くしますから、と彼に言った。彼は妻に別れを言いたかった。彼女は自宅にいた。そしてカソリックの僧からの最後の儀式を望んだ。血圧が急に降下し、彼はまた意識を失った。私はアラミンを注入した。彼はまた戻ってきて微笑み、“上出来だ”といった。私の人生でそんなにも褒められたことはなかった。私は急いで彼の自宅に電話を入れた。本人の弟が応答した。私は弟に事情を話した。本人の妻(彼女は英語がしゃべれなかった)を連れて一時間内に病院に着く、と彼はいった。すると看護婦が私を病室に呼び戻した。その電話は本人の病室から9メートルぐらいのところにあった。患者はまた意識を無くしていて、血圧はひどく下がっていた。アラミンが二度とも良く効いたので、三度目も試めしてみることにした。私がそれを注入すると、彼の意識が戻った。彼が私の目を見て“今回はすんでのところで死ぬところだった”といったのを私は一生忘れないだろう。彼に、妻と弟がこちらに来るところだ、これからお坊さんに連絡すると報告した。それらが全部すむまで何とかがんばるようにと彼にいいおいた。その時点で夜の11時になっていた。冬のデトロイトで、外は吹雪になっていた。三つの教区にあちこち電話をしたあと、とうとう一人の僧がここに来て患者に最後の儀式をしてもいいと承諾した。私が病室に戻ったときに本人の意識がまた薄らいだので、アラミンを打って彼の意識を戻した。僧は妻と弟よりも早く着いた。最後の儀式をしたときに患者の顔に安堵の色をみてとった。妻と弟が着いたときは、その僧がちょうど去るところだった。患者が妻と弟と話せるようにもう少しアラミンを打った。私は病室を離れた。数分して弟が出てきて、私に何とか出来ないかとたずねた。患者はまた意識を失っていた。病室に入ったときには私の中に、今度こそこの患者を行かせようという考えがあった。彼の妻は私の目を訴えるように見た。私はアラミンを注入した。また意識が戻り“どうもありがとう。できるなら妻の気持ちがおさまるようにもう少し時間をとりたいのだが”と彼はいった。私はやってみよう、と答えた。まるでロッド・スターリングの異次元にいるような気持ちがした。自分の価値に関して頭が混乱し、自分がいる立場にただ呆然としたまま病室を出た。すぐに妻が出てきて、例の目で私を見た。私は病室に入り、またアラミンを注入した。彼は意識を戻したが、今度は“もうこれで僕はいける、これで終わりにしてくれていい”と、いった。私はそのままにし、患者はそれから45分後に呼吸を止めた。

その時の体験は、かなりしばらくの間、私の頭から離れなかった。その患者はいつ自分の死のプロセスを終えるかを知っていた。前もって正式に、その夜が本人の最後になるという宣告を受けていなかったのだ。彼はそれを数時間のうちに整理し、解決し、プロセスが完了するようにさせたのだ。もし彼が、そのとき例え数時間の差だとしても、最後の儀式の前や、彼の弟や妻と話しをする前に死んでいたなら、彼は早まって亡くなつたことになつただろう、と現在の私は確信している。早まって亡くなつたとすれば、そのプロセスは妨げられることになつただろう。本人は未練を残し、怒りを持ったまま亡くなり、そして多分この破壊的な感情を次の生まれ変わりへと持ち越したことだろう。患者が次の生まれ変わりをなるべくクリーンに始められるような準備の手伝いをするのは、治療介助者としての我々の仕事の一部なのだ。この最後の意義ある数時間の生命延長が、この病人にとっては大き

な違いをもたらした信じている。

同じコインの反対側から見れば、死のプロセスを妨げるのは、身体的な“ひっかかり”かもしれないのだ。私の親しくしているオステオパスは、自分の体験のすべてが書き尽くされているような、そんな手紙を書いてよこした。彼女は病院で、肺癌で死にゆく患者を担当していた。病人は非常な苦痛と、非常な努力をしながら死を待っていた。私の友人はそのとき、ただ病人の頭蓋に手を触れただけだと書いてきた。頭は顕著な伸展状態にあって、そこで滞っていた。友人はより伸展へと頭蓋を持っていくと、そこでリリースが起こった。頭蓋骨は大きな屈伸サイクルへと入った。患者はそこで微笑み、深い大きな安堵の息を吸い、微笑みながら死んでいった。多分この患者の身体的な死のプロセスが行き詰まっていたのだろう。

そのほかにも、死とは関係ない移行過程で、どこかで障害があってなかなかそれを果たせない、ということが多分たくさんあるのだと思う。ソマト・エモーショナル・リリースでしばしば、こういったプロセスを、自然が仕組んだようにスムーズに移行できるように手伝えることができるのだ。天がそうなるように仕組んだ方法で完了したとき、私達は自由になり、より建設的な生き方へと歩みを進めることができるようになるのだ、と私は信じている。

### VIII. “バイオロジカル（生物）過程の完了” の補足

『バイオロジカル（生物）過程の完了』のセクションを書いてから、私の注意をひくようなプロセスがまた一つ出てきた。母親であること、というプロセスだ。昨今の産児制限や、墮胎ということは、職業や、仕事、生理時計や、母親であるということと深く関係している。

排卵を伴なう初潮が、女性の生理過程の引きがねとなり、それに続いて妊娠、出産、そして母親としての絆が起こるまでは、その過程が完了へと行き着かないのでないかと私は考えている。もしその女性に子供が生まれなければ、生殖過程は失敗し、未完了に終わることになる。それ故に、その女性はいろいろと形を変えた症状に悩まされることになるかもしれない。

最近の頭蓋仙骨治療上級クラスで、二人の女性参加者が、キャリア（職業）を追及していくことと母親になることは今まで苦しんでいた。どちらのケースでも、我々治療ファシリティターは、ソマト・エモーショナル・リリースで治療イメージと対話を使い、少なくとも彼女達のファンタジー（空想）の中で出産と母親のプロセスを完了したのだ。

どちらのケースも、例え40に近い年齢になっても完了していなかった生理プロセス、つまり初潮によってセットされたプロセスを体験完了することで満足させたように思われる。受胎し、妊娠し、出産し、母親としての絆を持つというプロセスをイメージで体験することで、母親であることをとるか、プロとしてのキャリアをさらに追及するか、という苦悩を解決したように思われるのだ。

“意志の驚異は止まることがない”といつも私の母はいっていたものだ。

## IX. いくつかの新しい体験

1989年の年に、とても意義深いレッスンが二つ起こった。ここで紹介することにするが、それをどう解釈しようと好きなようにしてもらって結構だ。それらはまだ完結したわけではないのだが、もつと分かるまで待とうという気持ちにはならないのだ。どちらのケースも、脳脊髄センターでの患者のための二週間集中プログラムで起こった事柄だ。

1. 30代の男性患者のケース。彼はロス・アンジェルスのフリーウェイで起こった狙撃事件の被害者だった。左耳後から弾丸が入り、頭蓋内、小脳の横下部、後頭骨を通り、環椎骨と軸椎骨を部分的に碎いて首後方で止まった。彼は言語機能を失い、車椅子に座ることになった。私たちは、彼の頭と首からエネルギー嚢を引き出すのに非常に困難していた。もしかしてこのエネルギー嚢をリリースするのに、射撃者の怒りと狂気とを結びつける必要があるのではないか、という考えがふと私の頭を横ぎった。私は単に、どうか射撃者の感情/エネルギーよ、傷口から出てくるように、と頼んだだけだ。これを大きな声でいった。このセッションには、他に数人が加わっていた。エネルギー嚢が患者の左耳後ろの乳様突起からゆっくりと出てくるにつれ、私たち全員が怒りと狂気を感じた。私は自分の心の中で、“畜生め、殺してやる”という声を何度も、何度も聞いていた。患者はこのセッションのあと変化を見せだした。彼の態度は良くなつた。話し始めるようなサインを見せ、足の運動機能のコントロールと、感覚が少し戻ってきた。

2. 二つ目の例は、十代の女の子2人が車に乗っていて他の車にぶつけられた、というものだ。直感で二人の女の子を治療台の上に並行にならんて座らせた。そして私はその二人の間に座った。運転していた方は私の左側で、助手席にいた方は私の右側にいた。二人ともその事故の記憶をだいぶ失っていた。私達は一緒にその事故を再体験し、二人の乗った車にかかってきた勢いをいっさきにリリースすることができた。このセッションの前までは拒否していた本人たちの怒りが表面に表れてきて、衝突した車を運転していた人に関しても話をした。二人とも今では自分たちの車に衝突した女性と会って、話し合ってもよいというところまできた。一人の女の子は事故の結果、車椅子に座りきりになり、もう一人は副産物として、脳神経3番と5番に多少の欠損が残った。このセッションは大成功だった。相手の車を運転していた人が抱いているだろう感情に対して、少しあは氣の毒に思う同情心まで引き出したのだ。このセッションの前も、患者たちに集中的治療を施してきたのだが、その事故を再体験することはできず、抑圧した怒りと関連づけることもできず、ましてや衝突してきた車のドライバーが、この事故で引き起こしたダメージについてどう感じているか、などを考慮するなど及びもしなかったのだ。そのセッションがあつてから、車椅子の少女は彼女の右足に自分の全体重を乗せかけることが出来た、というのを昨日聞いたばかりだ。

これが今日のソマト・エモーショナル・リリースだ。